▲第39回（撮影／鈴村芳子）

▲第38回（撮影／庄司富作）

▼第39回（撮影／渡辺君英）

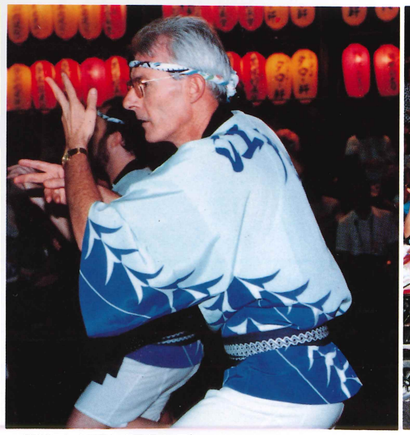
▼第39回（撮影／神﨑真）

▲第38回（撮影／石黒寛）

▲第38回（撮影／内藤達夫）

▲第39回（撮影／神山敏夫）

▲第39回（撮影／庄司富作）

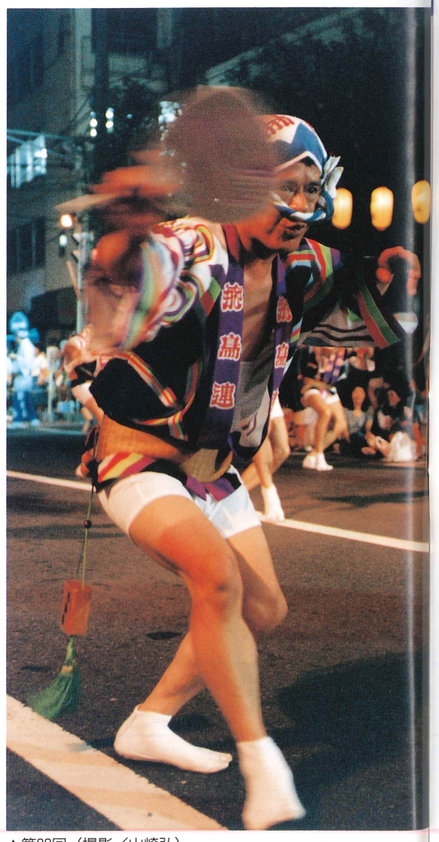


▲第38回（撮影／福角久子）

▲第38回（撮影／大平のり子）

▲第39回（撮影／正木サト子）

▲第39回（撮影／福岡信吉）

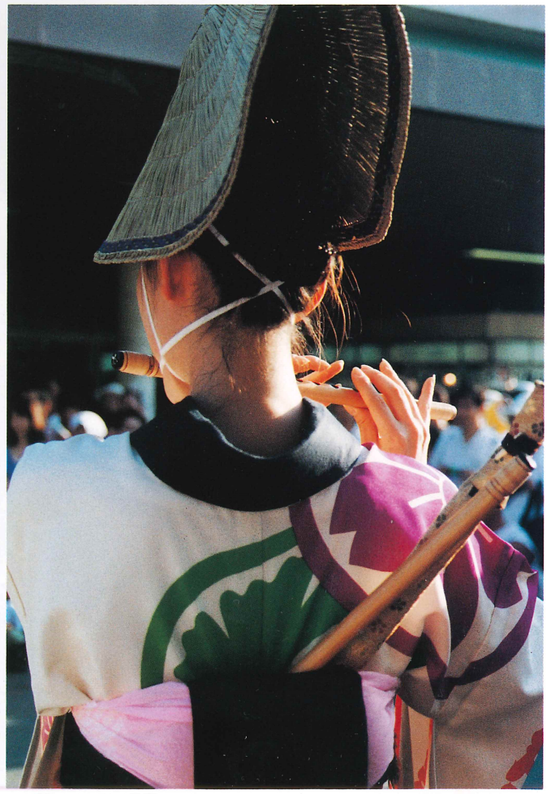


▲第39回（撮影／山崎弘）

▲第39回（撮影／田邊徹衛）

▲第39回（撮影／岩田年一）

▲第38回（撮影／高橋幸一）



▲第39回（撮影／日下英夫）

▲第38回（撮影／前田フサ子）

▲第39回（撮影／山田弥一）

▲第39回（撮影／神藤友衛）

◀第38回（撮影／宮﨑純一）

▲第38回（撮影／神山敏夫）

▲第38回（撮影／片山良子）

中央線沿線高円寺名物の阿波踊りが始まったのは昭和三十二年である。夏枯れで売り上げの少ない八月末に、なんとかお客を呼ぼうと考えだしたイベントである。

その高円寺阿波踊りは最初の頃は「高円寺ばか踊り」といった。踊るときの衣装は浴衣でなくてもよかった。シャツにジーパン、とんでもなく派手な衣装、暗黒舞踊を思わせるような不気味な衣装などを着た人たちがいきなり、客席からあらわれ出でて、自由に踊りまくった。

そういう意味では高円寺ばか踊りは高円寺という町の宣伝効果としてはあまり意味がなかったようだ。ところが、高円寺ばか踊りから高円寺阿波踊りに名前が変わってから俄然イベントとしての雰囲気が出てきた。

最初から「ばか」を強調して、高円寺という町のユニークさを出そうとするのではなくて、謙虚に本場の阿波踊りを真似る姿勢に変えたのだ。

これが高円寺阿波踊りが成功した秘訣なのだ。本場の阿波踊りのスケールと比べたら問題にならない。踊り手の人数、警備員の数、道路の広さなどのどれをとっても本場の阿波踊りの方が上である。

だが、高円寺阿波踊りとネーミングしたところがなかなかの広告マンなのである。「高円寺ばか踊り」という名前を変えていなかったなら、この高円寺のイベントも二、三年で消えていたに違いない。

それにしても高円寺阿波踊りというネーミングは上手だ。阿波踊りを気遣いながらも高円寺という名前は阿波踊りよりも先にもってきて、一見、高円寺の方が阿波よりも古い感じを与えるのがポイントなのだ。

つまり、阿波が高円寺を真似たように錯覚させる。この錯覚させたところが妙味なのだ。イベントコピーとしてはスバラシイ。

形は本場の阿波踊りをけなげに真似しながらもネーミングだけは強引さがある。このけなげさと強引さのバランスがスバラシイ。けなげに強引に進める商人の知恵がきらり光っている。

その証拠に高円寺阿波踊りが二年、三年とつづくうちにそれなりの格好がついてきた。本場の阿波踊りと形の違った高円寺風の阿波踊りになってきたからふしぎなのである。

いやはや、そうなると、大阪や九州の商店街でも高円寺阿波踊りを見習って、自分の商店街でも阿波踊りをやろうと高円寺阿波踊りをはるばる見にきた。あっちこっちで阿波踊りをやりたくなったが、本場の阿波踊りを見にいくのではなく、高円寺阿波踊りを見にきた。商売につなげるには阿波の皆さんには申し訳ないが、高円寺阿波踊りの方が参考になった。

真似るといういかがわしい力を利用して、とんでもなく違うものにしてしまう高円寺の商店街の人たちのパワーがすごい。物真似タレントのコロッケが歌手千昌夫の物真似をして、千昌夫以上の人気を博したことを高円寺はコロッケよりも三〇年以上前から知っていたのだ。本物の真似をしておきながら本物をおびやかす存在になりたいと昔から狙っていた。

いや、本物が偽物を参考にして、本物が偽物に励むところまでもっていきたいのが高円寺阿波踊りの夢と私はにらんだ。本場の阿波の皆さんにはこれまた申し訳ないが、これが高円寺阿波踊りの魅力だと思っている。

逆転の構図

ねじめ 正一

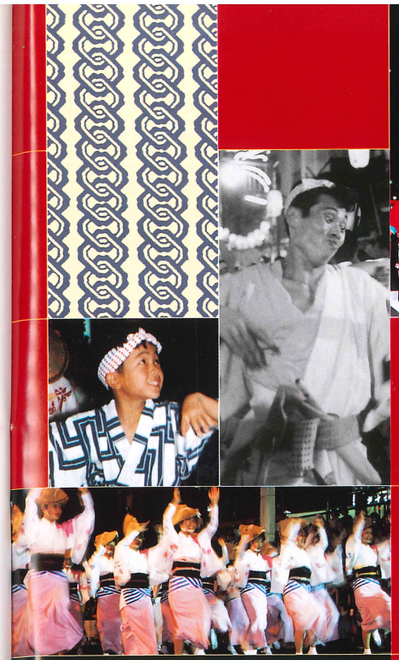
ねじめ・しょういち　昭和23年、東京・高円寺生まれ。詩集『ふ』で第31回H氏賞、平成元年『高円寺純情商店街』で第101回直木賞受賞。現在は、小説家、詩人、ねじめ民芸店の経営者として、テレビ・ラジオをはじめ多才に活躍。著書に『本日開店』『かなしい恋愛』『ご近所パラダイス』他多数。

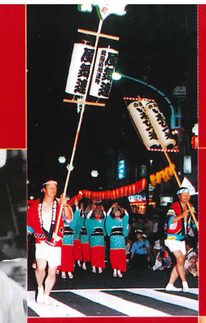
山あり谷あり高円寺奮闘記

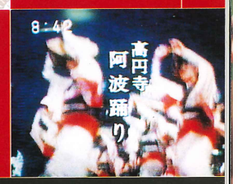
四十年のあゆみ

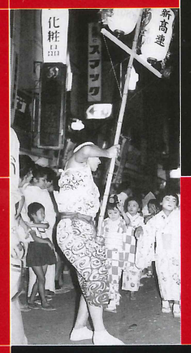
高円寺の阿波踊り、それは商店街の振興策として始められたものである。しかし年を追うごとに規模は拡大して日本全国へ、そして海外に赴くまでになった。その意義も利益追求から社会貢献へと深まりつつある。

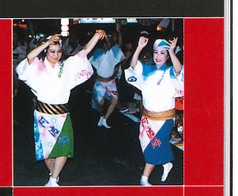
こうした興隆は、試行錯誤を重ねながら歩んだ歳月の上に花開いたものだ。昭和三十二年の夏に始まった歴史は、決して平坦な道のりをたどったわけではない。存亡の危機や本場徳島との出会い、そして高円寺をとりまく環境変化など、数々の資料が四十年の変貌を語っている。

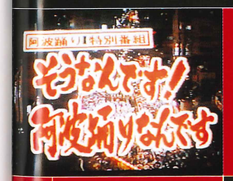


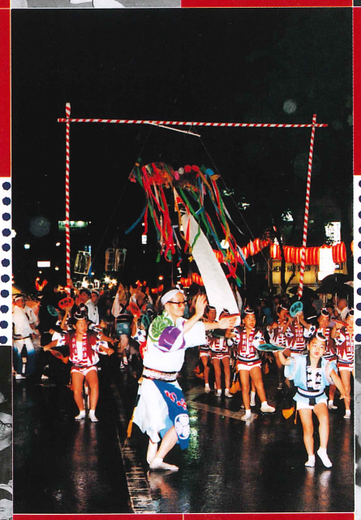


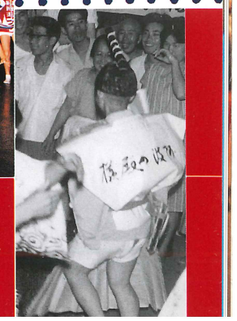












「なにか威勢のいいことをやろうじゃないか」商店会の青年が集まり、そして……

きっかけは青年部の誕生から

昭和三十二年の八月十三日。暑い夏の一日の仕事を終えた若者たちが、高円寺南口の魚屋「大晴」茂木氏宅二階宴会場に集まった。この夜、現在の高円寺パル商店街振興組合、当時の高南商盛会に青年部が誕生しようとしていたのである。

集まってきたのは商盛会の商店二世と役員、四十五名ほどである。当時七十五軒ほどあった地元商店街は、店主世代のつながりはあっても、その次代を担う若者たちの連携はまだなかった。「これからは若いもんの時代だ。お互い顔を知って相互理解を深めようじゃないか」という役員の呼びかけで、青年部の発足式が行われたのであった。

その夜、「ボンボン倶楽部」と名づけられた青年部誕生の記念行事として、何か新しい行事をやろうということになり、活発な議論がかわされた。中央線で隣の駅に当たる阿佐ケ谷では、七夕まつりがすでに商店街の季節行事として発足していた。この種のイベントがまだ少なかった当時の東京で大人気を博し、商店街に大きな売り上げをもたらす呼び物でもあった。何かそれに対抗できるものを、と生まれたばかりの青年部は意気込んでいたのである。

青年部の結成が八月の半ばで、月末には地元氷川神社の祭礼がひかえていた。それで神輿をかつごうという意見もあれば、盆踊りはどうだという提案も出る。

「ここの商店街には広場がないから、盆踊りみたいに場所をとるものはだめだ。大きな神輿をかつぐにも、道が狭いからなあ」

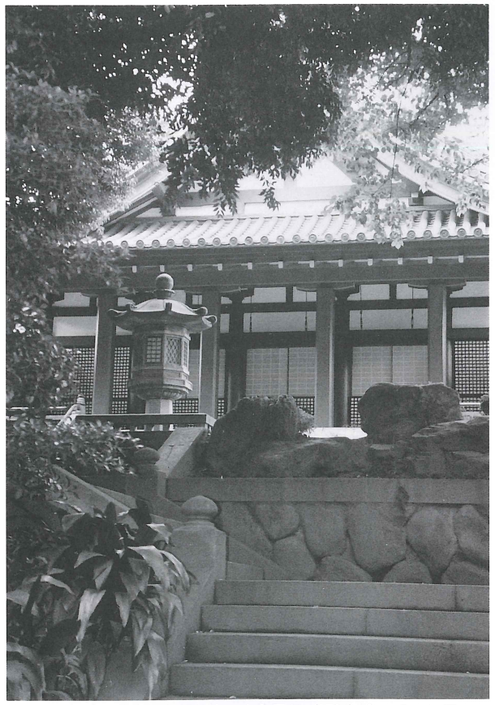
話はなかなかまとまらなかったが、そのうち若者たちの間から、誰言うとなく「阿波踊りはどうだろう？　道を練り歩けるからいいんじゃあないか？」

このアイディアに、役員の茂木氏が一番乗り気になった。昨年徳島で阿波踊りを見ているのである。

若者たちも考えた。東京で徳島の阿波踊りをやる。斬新な意見であるし、うまくいけば七夕祭りのように名物になるかもしれない……。「阿佐ケ谷が北国の名物なら高円寺は南国ムードで行こう」「よし、鳴門の渦でお客を高円寺に引き込もうじゃないか――」と意見がまとまった。

日にちは氷川神社のお祭りに合わせて二十七、二十八日。こうして、あとはすんなり決まっていき、散会となった。

夜風に吹かれながら、ひとつの目的が定まった新生青年部の若者たちの心は期待と不安に満ちていた。



第1回目の時に集合した長仙寺。宝永元年（1704）創立の古い歴史ある寺で、現在の高円寺パル商店街に隣接している。今でも夏が近づくと、境内を借りて練習する連もある

民踊の先生に教わる

「なんだ、結局だれも阿波踊りなんか知らないのか」

名称を「高円寺ばか踊り」と決めて準備段階に入り、いざ練習、と集まった青年部のメンバーは苦笑した。「何とかなるだろう、やってみようじゃない」と決定した阿波踊りだったが、本場の踊り方を指導してくれる人がいない。仕方がないので、伝手を頼んで高円寺在住の民踊の立花先生を紹介してもらった。

この時に教わった踊りは立花流の振り付けで、現在の阿波踊りとは似ても似つかぬ格好のもの。だが本場の阿波踊りを知る者がいないので、そんなことがわかろうはずもない。しかも練習はわずか三日間。みな振りを覚えるのに精いっぱい、といった感じだった。

いよいよ第一回の本番の日がきた。男女合わせて三十八人の踊り手は、揃いのゆかたで長仙寺（高円寺南二丁目）の境内に集合した。みな家の者から「頑張ってね」と励まされて出てきたが、胸はドキドキ、足はガクガクしていたという。この日参加した青年部のひとり、天野清一郎氏は「この時の悲壮な気持ちは今でも忘れられない」と語る。

寺の庫裏で男も女も化粧をほどこされた。意外と美しく似合う若者もいれば、ほとんど化け物という風体の者もいる。記念撮影を済ませ、フラフラとした足どりで通りに出た。第一回目の、記念すべき歴史的瞬間はこうして始まったのである。

門を出てみると黒山の人だかり。体のふるえが止まらないので、コップ酒をひとくち飲んで威勢をつけた。二列に並び、

高円寺駅の踏み切りから桃園川の宝橋まで約二五〇メートルを踊り抜いた。

「何でこんなことをやるんだろうか。恥ずかしいやらバカバカしいやらで、一刻も早く終わろうと、踊るというより走り抜けましたね」

これは当時踊った小沢淳男氏の回想である。

本番のおはやしはチンドン屋に頼み、演奏されたのは「佐渡おけさ」のリズム。知らぬが仏で、当時はみなこれが阿波踊り「のようなもの」と信じて踊ったのである。

化粧をしているから誰だかわからないだろう、いやそうあってほしい、と願いながら踊っていると観客の中から「あっ、○○ちゃんがいる！」と黄色い声がとぶ。自分の店の前へ来ると、気恥ずかしさからよけい早く走り抜ける。下り坂のコースという条件もあって、現在なら二十分ほどかかるところが、その時はものの四、五分で終わってしまった。恥ずかしくはあるし自信はないし、体全体をすくめながら下を向いて踊っていた彼らの姿が目に浮かぶようである。

この時ひとりだけ化粧を断り、毅然と踊っていた青年がいた。平成八年の今年まで四十年間、毎年欠かさず高円寺阿波踊りに参加している森田昇栄氏である。

「今に阿佐ケ谷の七夕を抜く、という予感があったから」

今日の隆盛を予想していた、というより信じていた者が、ひとりだけはいたのである。

昭和32年、第1回目の阿波踊り。これは長仙寺での休憩タイム。青年たちに笑顔を見せる余裕はなかったようだ

今度は歌舞伎調の踊り

二回目の夏が来ようとしていた。去年より少し早く練習に取り組んだ青年たちは、今年はしゃもじを握らされていた。高円寺駅の改札口の前で体操のトレーニングをし、歌舞伎の「六方を踏む」練習も積まされた。恥ずかしくても精いっぱいやるしかない。

指導される踊りは、去年より落ち着いたスローテンポの踊りになっていった。不器用な青年にとっては、かえってやりにくくなったようである。

本番のおはやしにはリヤカーに積み込んだテープレコーダーが使われ、この年初めて高円寺阿波踊りが新聞に報道された。当時「なべ底不況」の流行語が世相を表している世の中であったが、東京新聞に「ナベ底ふっとばすバカ踊り」という九行ほどの短い記事が載った。青年部のメンバーは記事を切り抜いて大切に保存した。

バカ踊りなんかやめてしまえ

初回に約二千名を数えた観客数は、第二回目の時には五千に増えていた。しかしほとんどが地元の者ばかり。これでは売り上げ増をねらう商店街の行事として意味がない。経費も思ったよりかかる。長仙寺の境内で練習する若者に「バカバカしいからやめろ」と言う町の人もいた。

そうして、三回目の準備に入る前の青年部は、会合のたびに議論百出した。

「もうよそうよ！　本当にバカみたい」という声がとぶ一方、「いや、続けてみようよ。続けなきゃわかんないよ」と言い張る者もいて、意見はまっぷたつに分かれた。最後には無記名投票をして、中止か存続かを決定することになった。

結果は十対九。わずか一票の差で継続が決まったのである。

「あの時、逆の結果だったら、今日の高円寺阿波踊りはなかった」と当時のメンバーは振り返る。

存続は決まったものの、今年の観客数が少なかったら来年からは廃止、という条件つきで今年の準備は始められた。とにかく動員数を増やさねばならない。その後、青年部員たちの家業を犠牲にして

昭和33年、第2回。昔の高南通り、今の高円寺パル商店街を踊り抜ける一行。背景に写る「鹽瀬」は今も現存する老舗である

の熱心な宣伝活動が始まった。

横断幕を張り、女の子を乗せた宣伝カーを走らせたり、風船をつけた自転車隊がデモンストレーションに回る。積極的な「ばか踊り宣伝隊」の活動が功を奏し、第三回（昭和三十四年）の観客は約二万人にのぼった。

踊りの指導の面では、師匠が日本舞踊家の西崎まゆみ氏に変わり、踊り方もまた変わっていた。男性は鳴子を、女性は大きな渋うちわを手に持ち、前回よりも細かくなった振り付けに苦労しながらの練習であった。

おはやしも、三味線を弾く人を乗せた屋台を引っ張って進む豪華なものになる。屋台のかつぎ手と踊り手は学生のアルバイトを募り、同時に歌のバイトも集めてこの日のために作られた「高円寺音頭」を歌わせようとした。が、一夜づけの練習では使い物にならず、青年部のメンバーがふたりで歌うはめに。

観客の動員に合わせて、内容を少しでも面白くしようとの一心であったのだろう。とりあえず、絶体絶命の存続の危機は脱したのである。

「これで阿波踊りを続けられる」青年部の存続賛成派は、ほっと胸をなでおろした。

留置場入りは覚悟で

昭和三十五年、皇太子御成婚のニュースに国民が沸き返った。同じ年に新道路交通法が施行され、第四回を迎えようという高南商盛会の活動に、思わぬ波紋を呼ぶことになった。

道路の使用許可が下りないのである。関係者は警察に日参して必死の説得をこころみたが、警察は「一商業活動のために天下の公道をふさぐことはできない」の一点張り。

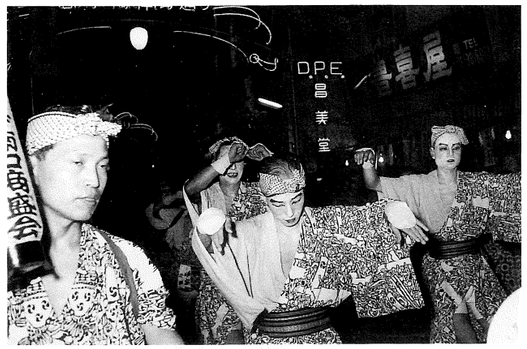
折あしく警察署長が交替したばかりの時期であった。何度も足を運んでは「地元の住民のための行事」だとか「氷川神社の例大祭の奉納」だとか、はては知り合いの都議会議員に同道してもらい「非行防止に役立っている」と口添えしてもらったり、手を変え品を変えて懇願した。が、それでも認めてもらえない。

小沢氏は当時の交通係長に「この気ちがい、また来やがったな」と怒鳴られ、「踊ったらただちにブタ箱行きだ」と脅されたこともある。

こうなれば反体制の血が燃える若者のこと、強行策をとることになった。もしもの場合、留置場行きは責任者の小沢氏の役、城石昇氏は連絡係、差し入れは誰、と役割分担も決まった。

こうして決死の覚悟で臨んだ大会であったが、直前になってとうとう一日だけの許可が下りたのである。知り合いの都議を通じて本庁の交通部長から地元警察に話が行ったという説もあれば、警察が地域住民に対して行ったアンケートの結果が、高円寺阿波踊りに好意的だったからという説もある。

この年まではこうして、内に存続賛成・反対の二派をかかえ、外に道路交通法の脅威に憂う、まことに不安定な暗中模索の時代が続いたのである。だが、それも未来のためのステップに過ぎなかった。徳島県人会の阿波踊り連「木場連」との出会いによって、高円寺阿波踊りは大きく開花するのである。



男たちの化粧はこの第2回目の時まで続いた

あこがれの徳島

このころ、高円寺独自の「ばか踊り」をずっと続けていていいのだろうか、と現状を疑問視する声が上がり始めた。こうした機運をとらえて森田氏は「本場・徳島の阿波踊りを学ぼうじゃないか」と提案。青年幹部は徳島県人会や徳島県東京事務所、徳島県物産斡旋所など、「徳島」と名のつくところを手当たりしだいに訪問する。

夏の暑い時候に、エアコンもないスバル360に乗り込んで汗をふきふき、正調阿波踊りを教えてくれる人を尋ねてまわった。

だが、「〝なぜ、高円寺で？――生活・文化がまるで違う東京でやってみても、所詮はまがいもの。それよりは、徳島をヒントに、むしろ東京は東京独自のものをやってみたらどうですか〟と、はじめのうちは徳島の人たちも半信半疑だったといいます。

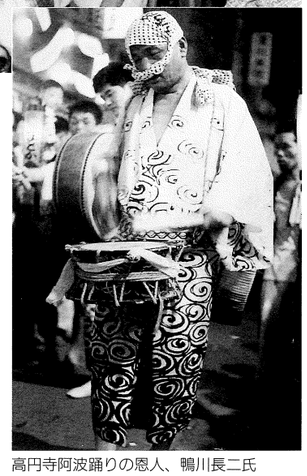
〝所詮はまがいもの〟とは、ずいぶん厳しい言い方のようですが、〝教えて教えられるものじゃないよ、これは――〟というのが徳島の人たちの本音だったのかも知れません」（『踊れ高円寺』高円寺阿波踊り新聞／昭和五十五年発行より抜粋）

とあるように、決してたやすいことではなかった。それでも懸命に協力者を探して歩くうち、徳島新聞社の東京支社で記者をしていた谷田匡氏に出会ったのである。

のちに東京支社長になった若き谷田記者は話を聞き、写真を見て「これはいける」とこの変わった尋ね人の記事を新聞

いつまでもばか踊りじゃだめだ。ようやく高まる本物志向に「徳島探し」が始まった

踊り手65名、観客４万人を数えた昭和35年、第４回目。まだ警察の道路使用に対する許可方針は厳しかった



高円寺阿波踊りの恩人、鴨川長二氏
第５回目に木場連として出場した時のもの

に載せてくれた。また、何年か後に徳島県の阿波踊り連と高円寺の連とが姉妹連の締結をする際にスムーズに話がまとまったのは、谷田記者が高円寺阿波踊りの盛況ぶりを随時記事にまとめ、徳島に伝えてくれた功績が大きいといわれている。

そして、徳島新聞社を通じて徳島県出身で杉並区馬橋在住の作家・三田華子氏や、木場の鴨川長二氏（いずれも故人）を紹介されたのであった。

鬼の師匠

江東区の深川、木場は当時、「東京の徳島」といわれたほど、徳島県の出身者が多かった地域である。徳島県人会に所属する人々で結成された「木場連」という阿波踊りの連もあった。昭和三十七年に入って、青年部のメンバーはこの「木場連」の連長であった鴨川長二氏に阿波踊りの手ほどきをお願いした。

鴨川氏は青年部の依頼に快く応じ、手の空いている木場連のメンバーたちを呼び寄せて、指導してくれることになった。

長二氏の子息、鴨川實豊氏は語る。

「父は無骨な人間でしたが、阿波踊りのことになると夢中になる人でした。どんな時間だろうと、これから寝ようとしている時であっても、高円寺の森田さんから電話があるとすぐに飛んでいった。それくらい熱心だったし、好きでもあったんですね」

しかし踊りに関しては厳しい師匠でもあった。まずはひとりずつ今までの踊りをやって見せろと言われて、青年部のメンバーが実際に踊ってみると、あきれた顔で「全然なっちゃおらん」とひと言。ところが、それまで高円寺で一番評判の良かった神藤信一氏は「それでも、君のが一番近い。何とかさまになっている」との評価をもらった。この時から神藤氏は青年部のなかで「踊りの神様」と奉られることになる。

鴨川氏はおはやしも教えてくれたが、一生懸命のあまり時にはバチで弟子の手を叩くこともあった。こうしたしごきに耐え、十人ほどの有志が仕事を終えてから毎晩木場通いをして踊りの技を磨いたのであった。

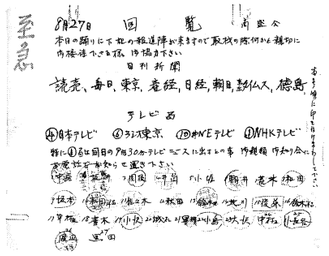
この前年にあたる昭和三十六年、青年部は木場連の連員に指導を受けている。本場の指導を受けたのはこれが初めてであった。この年の本番では「ばか踊り」に木場連の連員十九名が初参加して踊りの先頭に立ち、衣装も木場連から借りて本格的な阿波踊りへの第一歩をしるしている。しかし急速に阿波踊りのテクニックが向上していったのは、何といっても鴨川氏に厳しく仕込まれてからのことである。

上／昭和37年、第６回の時は報道陣がつめかけた。当時のスピードグラフィッス、スピグラと呼ばれたカメラを構えている

中／NHK四国向け放送の収録風景。霞ケ関のNHKスタジオにて（昭和35年）

右下／昭和36年、大会前に取材の回覧状が会員に回された

左下／昭和36年、第５回。TBSラジオのインタビューに応える黒田事業部長



ばか踊りから阿波踊りへ

観客の方は第四回に四万人を集め、第五回には倍の八万人を数えた。初回三十八人だった踊り手は五回目で約九十人に増えていた。高円寺の阿波踊りの参加者数は、前年と同じ年はあっても、決して減ることなく今日まで至っている。

昭和三十五年に初めてテレビ放映された高円寺阿波踊りだが、翌三十六年もTBSラジオや、NHK四国向け放送に出演した。これは木場連の誘いで、霞ケ関のNHKスタジオで共演をした。

ちなみにこの年は企業（野村証券）の初参加があった年でもある。踊りのコースが延長されたり、商盛会でそろいの波千鳥のゆかたを作ったりと、徐々に拡大・充実の様相を見せ始めたころであったが、ひとつのエポックとなったのが昭和三十八年の第七回目である。それまでの「高円寺ばか踊り」から正式に「高円寺阿波踊り」へと名称を変更した。

木場連に教わり始めて三年目、たどたどしくもようやく本物志向へと脱皮したというところであろうか。前年、踊りの先頭に立ってもらった木場連の連員と、商盛会の連とで初めて二連という形の参加となった。親鳥に見守られながら、巣を飛び立とうとしている若鳥の姿を思い起こさせる。

だが、大会第二日目にあたる八月二十八日に猛烈な夕立があり、桃園川が氾濫して出水した。この日のために厳しい練習を重ねてきた連員の中には、空を仰ぎ泣いて悔しがった者もいたが、二日目の踊りは無念にも中止となった。

四十周年に寄せて

東京都知事　青島幸男

暑さも吹き飛ばす元気な掛け声が東京のまちにこだまする夏の風物詩、高円寺阿波踊りが四十周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

この四十年の間に、高円寺阿波踊りは、地元はもとより多くの都民の皆さんが待ち望む行事として発展してきました。そして、この東京に、文化のかおりやほとばしる活気を与え続けてくださいました。

地元の皆さんのこのような活躍を見るにつけ、東京にもいろいろな故郷があり、そこに愛着を持つ方々がそれぞれ頑張っておられることに感動し、大変うれしくなります。

私は日本橋生まれですが、夏と言えば、うだる暑さの中でアイスキャンディを頬張る子供たち、打ち水がされた路地の縁台に涼む大人たち、夜空に華ひらいた花火など、なつかしい思い出があります。

日中の猛暑がまだ残る高円寺のまち中を、色とりどりの浴衣を身にまとって踊る多くの老若男女の姿を見るとき、私たちは、永く記憶の中に仕舞い込んできたそうした昔を思い出し、なつかしさを誘われる気がします。

高円寺阿波踊りのような行事が、とかく忘れがちな地域の交流や連帯の大切さを思い起こさせてくれます。私が目指している生活都市東京も、このような地域の連帯があってこそ、着実に築かれていくものと確信しています。

これまで四十年にわたり続けてこられた地元の皆さんのたゆまぬ努力と熱意に改めて敬意を表しますとともに、今後ますますのご発展を心からお祈りいたします。

徳島から持ち帰った八ミリが、高円寺阿波踊りの魂を揺さぶった

これが真の阿波踊りか

昭和三十九年、東京オリンピック開催。東海道新幹線が開通し、大きな経済効果を及ぼしたこの年、高円寺南口の商盛会以外で初めて「新高円寺通り商店会」が正式に大会に参加した。

三十六年度の準備中に北口の銀座商店会から参加申し込みがあったが、踏み切りや道路の問題など諸般の事情により実現していなかったため、ずっと商盛会の単独主催になっていた。だが、この時から商盛会だけの行事としてではなく、高円寺駅周辺全体に発展していく道を歩み始めるのである。

森田氏が撮影してきた当時の徳島（昭和39年）。子供の踊りですら「さすが本場」と唸らせるものが

同じころ、阿波踊りにかけては人一倍熱心に研究する森田氏は、真の阿波踊りをみんなに広めるにはどうしたらいいか考えあぐねていた。

木場連の鴨川連長に教わって数年、何とか阿波踊りらしくなってきた。が、それは一部の熱心な人だけで、あとは相変わらずのばか踊り。これではいけない。なんとか本場徳島の踊りを伝える方法はないだろうか……。

徳島新聞社はまたも好意を示してくれた。

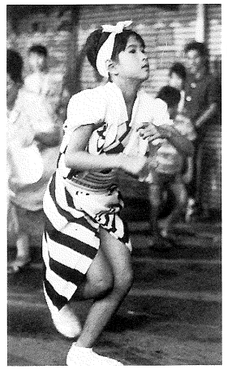
「それなら徳島へ行って、じかに阿波踊りを見てきたらいい」

往復の切符と泊まる宿の手配をしてくれた。八月中旬、森田氏は単身徳島に向かったのである。夜九時の急行で立ち、着いたのは翌日の午後三時。町に出た森田氏を驚かせたのは、駅前はもちろん、町角や路地裏で昼間から踊っている本物の「踊る阿呆」たちだった。

「高円寺もこれでなくちゃいけないな」と感じた森田氏は、夜の演舞場で夢中になって阿波踊りの八ミリ撮影を始めた。腕には徳島新聞社が用意してくれた腕章を巻いていたので、どの会場へもフリーパスで入ることができた。このフィルムを持って帰れば、高円寺のみんなに本場の踊りを見せてやれる。高円寺はもっともっと良くなる。

帰京してすぐに、映写会が開かれた。画面に映る阿波踊りを見て、みな少なからずショックを受けたという。これが本場の阿波踊りなのか……。

「今までのは何だったんだ」「もう恥ずかしくて踊れやしない」口々にそんな意見が出る。映写会は何度も何度も、それこそ「画面に雨が降るくらい」行われた。ともかく「これこそ阿波踊りだ」とみなの目が覚めたのである。



子供連は昭和35年に登場した（写真は昭和39年のもの）

翌年は皆で徳島へ視察に行けるように、積み立て貯金が始められた。そして昭和四十年には「阿波踊り留学」と称して、有志十二人が徳島へ旅立った。

独立連が生まれる

この昭和四十年の第九回には、踊り手とおはやし合わせて五百名が参加。観客は一日に十二万五千人と集計された。踊りのコースは青梅街道までの八百メートルへ大幅に延長された。

そして迎えた節目の十周年。ビートルズが来日して巷に熱狂的ファンがあふれたこの年、高円寺阿波踊りには参加者八百名、観客二十八万人。付近の八つの町会の理解と協力を得て、盛大に幕開けした。北口銀座商店会からも有志十三名が踊りに初参加した。

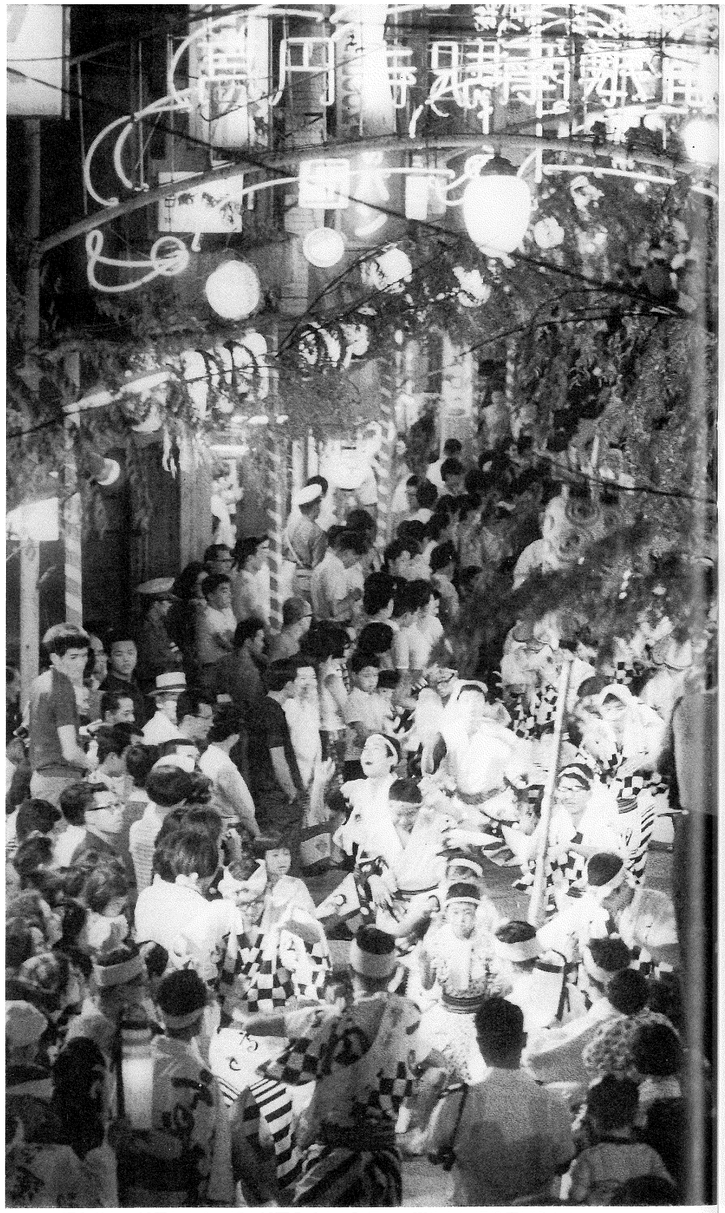
いしだあゆみらタレントも加わって、華やかに行われた第十回大会は、意外なハプニングにも見舞われた。

当日はNETテレビ（現テレビ朝日）の「アフタヌーン・ショー」という生番組の中継があり、六本木のテレビ局玄関先で踊り浮かれていた八十五名の連員たちは、撮影を終えてすぐ「商店街で火事だ」の知らせにびっくり仰天。急ぎ帰ってみると、町なかに消防車がずらりと並んで大騒ぎしている。

南口の商店六軒が焼失したほどの大火だった。出演者の中で被害に遭った家はなかったものの、先ほどまでの浮かれ気分はどこへやら、みなこそこそと帰宅したのであった。

八月の末、高円寺選抜隊十一名はTBSテレビで徳島阿波踊りのトップスター、小野正巳氏と共演した。このとき小野氏は高円寺の森田氏に「来年、今の蜂須賀連から独立して日本一の連を作るんだ」と話したという。そこで森田氏も冗談まじりに「私も東京中の踊り好きの人を集めて、東京一の連を作ります」と答えたのである。

冗談のつもりが、いつの間にか現実になっていた。翌年高円寺には森田連長率いる初の独立連「葵新連」が誕生する。独立連とは高円寺独自の言い方で、商店会や企業のバックアップのない、真に踊り好きな者が集まって作った連を指す。経費のすべてを連員が負担しなければな



昭和41年の10周年大会。観客12万５千人を動員し、華やかに繰り広げられた

四十周年おめでとうございます

杉並区長　本橋保正

高円寺阿波踊りが、本年、四十周年の記念の年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

昭和三十二年に、商店振興と地域住民との交流を目指して始まった高円寺阿波踊りが、今では夏の風物詩として、杉並区のイベントの枠を超え、全国的にも評価され、毎年、百万人もの見物客を集めるまでに成長いたしました。

これも、事業に携わってきた歴代会長さんをはじめ、役員の方々のご努力、関係各位、地元住民の皆様方など、多くの方々のご理解とご協力の賜と深く敬意を表します。

杉並区の事業でも、いろいろとご協力いただいております。「すぎなみふるさとまつり」や「産業フェア」などへの参加や、交流友好都市であります群馬県吾妻町、北海道風連町、オーストラリアのウィロビー市、韓国の瑞草（そっちょ）区などとの交流事業へも積極的にご協力いただき感謝申し上げる次第です。

本年は、記念誌の発行や八月二十五日に予定されている記念式典の開催、資料の展示、テレフォンカードの作成など、いろいろな四十周年記念事業を計画されていると伺っております。杉並区といたしましても、厳しい財政事情ではございますが、できるかぎりの応援をさせていただく所存です。

この四十周年を契機として、東京阿波踊り振興協会が今後ますます発展し、高円寺阿波踊りがさらに飛躍を遂げられることをお祈りしてご挨拶にいたします。

らないので、独立連の結成は非常に勇気のいることなのである。

ふたりの大恩人

このころは稽古にしろ本番にしろ、本当に熱が入っていたと語るのは、現在、東京阿波踊り振興会の副会長を務める塚本忠吉氏である。

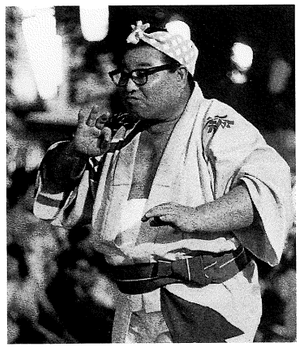
「昇っていく最中でしたね」

練習に明け暮れ、毎晩の帰宅が十一時におよぶ者もいた。阿波踊りと聞けば、どこへでも飛んでいった。

昭和四十二年、中央線が高架線となって踏み切りがなくなった。北口銀座商店会が正式に参加し、踊りの路線も北口へと延びる。高円寺阿波踊りは文字通り、全高円寺のものとなったのである。

この年の本番では、独立連「葵新連」の誕生を祝って、はるばる徳島から小野連長率いる「葵連」十五名が友情出演した。初めて見る本場の踊りは大人気を博し、群衆から喝采がわき起こった。

「葵新連」と同時に「天狗連」も誕生した。以降、本格的な技術を目指す同好の士が集まり、独立連をつぎつぎに結成していった。これは当時の技術向上に大いに貢献したものである。


徳島の阿波踊り名人、小野正巳氏

同じ年、「葵連」による初の勉強会が開かれた。場所は神戸銀行の三階ホール。徳島へ行ったことのない者が、高円寺で現役の踊りにじかに触れることのできた最初の機会である。以後、小野氏は毎年のように高円寺へ来て、その名人踊りを披露した。いわば成長期の高円寺における、技術向上のさらなる起爆剤の役割を果たした。指導のリーダーを務めた小野氏は、昭和三十七年に初めて徳島の阿波踊りを教えた鴨川氏と並んで、高円寺阿波踊りの二大恩人と呼ぶのにふさわしい人物と言えるだろう。

道路が広がり、技の競演へ

昭和四十三年ころになると、明治百年を期に警視庁の許可方針がゆるみ、都内の各商店会でも阿波踊りが取り入れられた。高円寺阿波踊りでは写真コンテストが始まり、入賞作品の展示が行われるようになった。これは一時休止するも、今日に至るまで続いている。

昭和四十四年、高円寺南口駅前の道路、高南通りが整備拡張され、幅十八メートルに広がった。町会の人々に会場整備や警備など多大な協力を得て、大演舞場が設置された。

昭和四十五年に、阿波踊りを年中行事とする都内各地の商店会に呼びかけ「東京都商店街阿波踊り振興会」を作った。情報交換や技術交換、相互の援助を目的としたものだったが、活動はあまり活発にならず、この組織は二、三年で自然消滅している。

昭和四十六年に迎えた十五周年は、宣伝広告を強化して本格的なポスターを作り、電車の車内広告や駅貼り広告も行った。これは後の隆盛の大きな一因となった。サンケイ新聞社の後援がついたり、大演舞場が前夜祭が始まったりと拡大の一途をたどる。

翌年には有力な独立連がほぼ勢揃いし、高円寺を彩る主力連が技を競い合う時代に入っていく。

ビバ！ アワダンス

突然のオイルショックに見舞われた昭和四十八年。その影響は大会にも波及し、広告提灯用の電線が急に不足して大幅な値上げとなった。が、こうした不景気下にも高円寺阿波踊りは最盛期に入っていくのである。翌四十九年は各地の阿波踊りの応援や指導、さらにテレビ出演と多忙をきわめた。

昭和五十年、十五連からなる連長会が発足。

昭和五十一年、二十周年の節目を迎えた高円寺阿波踊りは、アメリカ建国二百年祭の催し物としてサンフランシスコ、ロサンゼルス、ホノルルの三都市から招待を受けた。初の海外遠征の夢がかなったのである。

「いろは連」を中心とする六十名が、昼はパレード、夜は歓迎レセプションのスケジュールをこなし、地元の人や日系人と大いに触れあった。この年以降、インドネシアのジャカルタ、ドイツのハンブルグ、フランスはパリやニース、ハワイなど次々と海外への招待が続く。

サンフランシスコ市庁舎前での大パレード

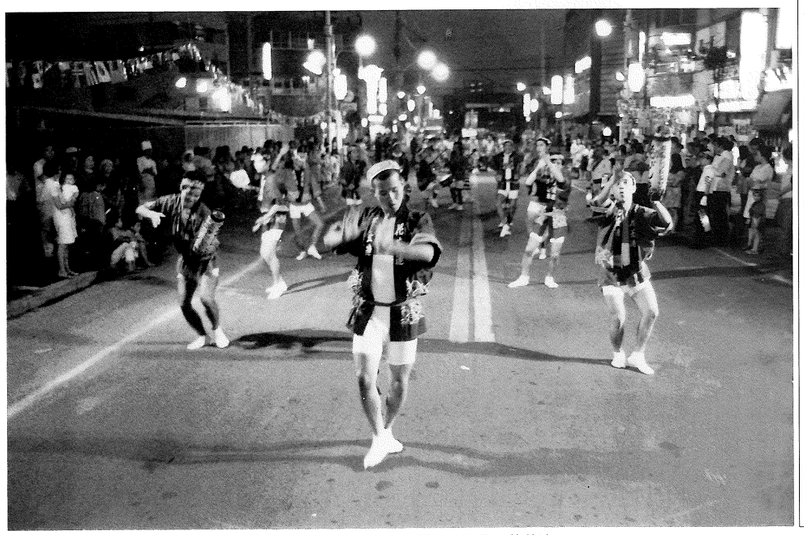
都知事のテープカットが恒例に

昭和五十二年「東京阿波踊り振興協会」が正式に発足し、高円寺の阿波踊りに関する一切の業務はここに一元化されることになる。

昭和五十三年、商工会議所百年記念の全国郷土祭に出演。天皇陛下ご臨席のもと、徳島から百五十人、高円寺から六百人が集まった。昼は選抜隊の見せ場、夜は全員が参加して踊る。このことは高円寺の連と徳島の連との交流が、より盛んになるきっかけとなった。

「踊れ高円寺」と題した年刊新聞も発行された。それまで高円寺阿波踊りの歴史をまとめたものがなかったため、これが初めての記録である。

昭和五十四年に鈴木前都知事がテープカットし、以来恒例となる。


昭和44年、広くなった高南通りで踊る花菱連

お江戸で交歓乱舞
高円寺阿波踊りに本場の踊り連
昭和42年8月28日、徳島新聞より

阿波踊りを日本中に知らしめたのは徳島、世界の阿波踊りにするのは高円寺

四十周年を迎えられ更なる発展を

杉並区議会
第五十五代議長 井口保明

「高円寺阿波踊り」が四十周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

発足当時、氷川神社の祭礼と併せて地元商店街と地域の振興のためという大きな目標をもって始められた「高円寺阿波踊り」がここに四十周年を迎えられましたことは、まさに関係者の献身的なご努力と不断のご労苦の賜物と深く敬意を表す次第であります。

毎年阿波踊りが行われます八月の三日間は、高円寺では百万人以上の観客に熱狂と感動を与え、あたかも過ぎ行く夏を惜しんでいるかのようです。

高円寺で大きく育った阿波踊りはまさしく東京の祭りの名物行事のひとつになりました。

阿波踊りは、海外に日本を紹介するものとして、また東京都の国際文化交流事業としての民間親善においても、オランダのユトレヒト、北京等でそれぞれの目的を果たしてきました。

当区の海外友好都市であるオーストラリアのウィロビー市でも阿波踊りを通じて友好親善が図られ、さらに友好・交流都市の群馬県吾妻町、北海道風連町とも、相互に阿波踊りを介して交流を深めているところです。

地域に根ざしたお祭りは、地元の人たちはもとより、地方からの人たちとの心のふれあいを一層深めていくことでしょう。

杉並区議会も「高円寺阿波踊り」の更なるご発展に協力してまいる所存であります。

今後「高円寺阿波踊り」が益々充実し、地域の活性化が図られますよう並びに東京阿波踊り振興協会の皆様のご活躍とご健勝を心よりご祈念申し上げます。

昭和五十五年、新たに都知事杯と区長杯が設けられ、優勝連に贈られた。

昭和五十六年には「連長会」を発展解消し「高円寺阿波踊り連協会」を設立。現場サイドから高円寺阿波踊りの発展に尽力する態勢が整えられた。また、国際障害者年を記念して障害者とボランティアが連を結成して初参加し、観客の惜しみない拍手に包まれた。

鴨川氏を偲ぶ

昭和五十八年の第二十七回大会に、木場の「天恵連」が登場した。天恵連はもとの木場連であり、二十年ぶりの出場となる。高円寺阿波踊りの恩人、同連連長鴨川長二氏が同年五月に七十五歳で他界しており、その追悼をかねたものであった。

昭和五十九年、NHKの教育セミナー「ふるさとの発見・高円寺阿波踊り」が放映された。この番組は、長らく途絶えていた氷川神社奉納阿波踊りが復活するきっかけとなった。

同年から三年間にわたり、立教大学社会学部・松平誠教授の研究室が、高円寺阿波踊りの実態調査を始めた。その研究成果は昭和六十三年に*季刊『人類学』誌に掲載された「現代都市祝祭の構成――高円寺阿波おどり」にまとめられている。

三十年ぶりに「ばか踊り」

昭和六十一年に高円寺阿波踊りは三十周年を迎えた。大会に先立って記念誌『どよめきの三十年　おどれ高円寺』が発刊されたが、これは約八十ページにわたって連紹介、三十年の歴史、座談会やイラストマップなどが掲載されたものである。

右／昭和53年から発刊された「踊れ高円寺」は、草創期から興隆期の歴史を語る貴重な資料である（B4判）
上／鈴木都知事（中央）のテープカットが、昭和54年以来恒例となる

盛上った阿波踊り

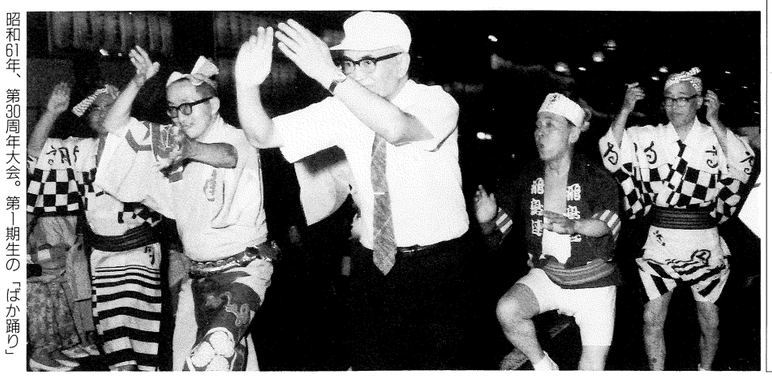
知事杯「江戸っ子連」　区長杯は「葵新連」に

知事杯に加えて区長杯が出、鈴木都知事が上り築木都知事を迎えて開会式が行われた。昭和五十五年の「高円寺阿波おどり」は、高円寺氷川神社の祭礼を合せまた一段ときらびやかにフィーバー。例年を上まわる見物客がひっくり街々を埋めた。

九月二十七日午後六時半から下北沢舞場（高南通り）で開かれた開幕式では、鈴木都知事が上り築しいマイタウンづくりをめざす私の考えとも会致する行事であり、ぜひ今後とも一層盛りあげて欲しいー と第二十四回阿波おどりの開幕に当たってお祝いの挨拶。鈴木都知事と区長代理松田助役、根津政茂高円寺阿波おどり振興協会名誉会長のテープカット（写真上）で花やかにクス玉が割られ、二日間にわたる本大会の幕が開けられた。

初日は生憎の小雨模様だったが延長三米のコースにはずり賑やかな踊り連の列が続き、沿道は見物客でびっしり満員。最終日の二十八日には天気も恵まれ、最盛時には国電高円寺駅の改札制限が行われるほどの盛況ぶりで、終って午後九時半から高円寺駅南口広場で閉会式が開かれ、小沢淳男高円寺阿波おどり振興協会々長から入賞の各連に各種の賞状や賞品入賞カップの伝達が行われて二日間にわたり夜の高円寺を熱気のウズにまき込んだ本年度の阿波おどりを閉幕した。

今年初の知事杯は「江戸っ子連」（杉谷宗彦連長）に、また区長杯は、テレビ等で幅広く活躍しながら本大会では初の入賞という「葵新連」に、阿波おどり振興協会長賞は、いろは（上村明男連長）天狗（中村和男連長）あすかの（関根敬邦連長）若駒（田中弘連長）菊水（山崎清連長）の各連がそれぞれ贈られた。



昭和61年、第30周年大会。第1期生の「ばか踊り」

＊季刊『人類学』第19巻2号／1988年6月25日発行／編集・京都大学人類学研究会（近衛ロンド）／発売元・㈱講談社

イタリア・フィレンツェにて

大会を終えて息つく暇もなく、十月にはイタリア・フィレンツェで開かれたジャパン・ウィークに初参加。EC諸国の主要都市を回って日本の郷土芸能を紹介するイベントである。「ガリレオ生誕の家」前の広場で、日本を代表する伝統芸能・青森県の「ねぶた」と一緒に踊った。

昼間はパレード、夜は劇場に出演。劇場が開くのが遅いヨーロッパでは、プログラムは午後十時ごろ始まり夜中の二時まで続く。日本からの参加者たちは眠い目をこすりつつ踊った。

少年じゃないのに

昭和六十二年、オランダ・ユトレヒトのジャパン・ウィークに八十五名が参加。海外遠征には連協会の中から希望者を募って参加する。ジャパン・ウィークでは欧州各国を回ったが、ここが最も大規模だった。

阿波踊りの海外遠征は税関の通過が大変である。大太鼓や提灯などさまざまな道具が必要なため、大きな荷物となる。外国の税関は狭い場合が多く、大きな箱などは裏から出さなければ通れないのだがいつもなかなか許可が下りないという。提灯など見たこともない外国人に「これは何だ」と聞かれるが、説明するのもひと苦労。ようやく切り抜けたのに、荷物だけを乗せたバスが手違いでどこかへ行ってしまい、ホテルに着いていないということもあった。

昭和六十三年、オーストラリア・シドニーのオペラハウスで開かれた建国二百年祭に八十六名が参加。シドニーと東京都とは姉妹都市にあたり、副知事や都議員らとの同道となった。

メインストリートを堂々と練り歩く騎馬隊。そのあとに続く踊り手たちの先頭に立ったのは第一期生の小畑肇氏であった。小柄な人だったので、翌日地元の新聞に「日本の少年踊る」という意味の見出しが載ってしまったというエピソードがある。

この年の第三十二回大会は徳島より姉妹連の平和連が友情出演した。

地域社会発展のため一層のご尽力を

東京商工会議所会頭　稲葉興作

東京阿波踊り振興協会主催の「高円寺阿波踊り」が発足四十周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

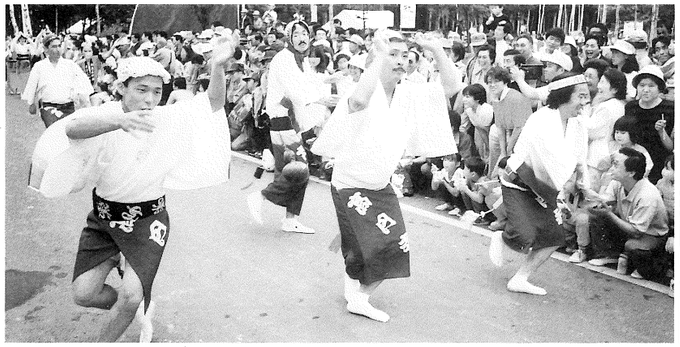
「高円寺阿波踊り」は四十年の長きにわたり、踊りつがれその輪が大きく広がり、今や地元杉並はもとより、東京の夏に欠かせない一大風物詩として定着する一方、海外においても文化交流と友好を深めるなどその活躍はめざましいものがあります。関係者の皆様のご努力に対し、深甚なる敬意を表する次第であります。

東京商工会議所は地域社会のため各種活動を展開しておりますが、私共は貴会のような地域おこしの運動が地域を活性する上で極めて意義あることだと思っております。こうしたことから、平成七年三月に挙行致しました東京商工会議所百二十周年の会員大会にご参加をお願いした訳ですが、貴会を中心とした東京の「阿波踊り」は会場を和ませ、大会を大いに盛り上げていただきました。

日本は今、バブル経済の崩壊による閉塞感からの脱却に向けて、新しい経済社会の枠組みを構築するための産みの苦しみを味わっております。しかし、このような時だからこそ、人々は心の豊かさを求めるのであり、そのためにも祭りや伝統行事等が見直されるのではないでしょうか。イベントを通して企業や住民が地域を見直し、共通の地域アイデンティティを確認しあうことは二十一世紀に相応しい「ふるさと東京」に求められる最も重要な要素と言えましょう。

貴会におかれましては、激変する時代にも、四十年の伝統、蓄積されたパワーを遺憾なく発揮され、「阿波踊り」を伝統文化として次世代にも継承し、東京の地域・文化の振興に一層ご尽力を賜りますようお願い申し上げますとともに、貴会のますますのご発展を祈念いたしましてお祝いのごあいさつとさせていただきます。

阿波踊りは言葉を越え、国境を越えて心をひとつにする


北海道風連町の「白樺まつり」に出演（平成４年）

風連町では老人ホームを訪れ、踊りの最中に握手

国内姉妹都市での歓迎ぶり

第二十三回の昭和六十四年、昭和天皇が崩御して元号が「平成」に変わる。多くの行事が中止になるなか、高円寺阿波踊りの開催も危ぶまれた。しかし崩御が一月、大会は半年以上経過した八月ということもあり、例年通り開催された。

大会には徳島から芸茶楽連が友情出演した。テレビ朝日の番組「踊りに燃える町――高円寺阿波踊り」も放映された。

十月、横浜港市制百周年記念祭には、外部出演としてはそれまでで最多の参加者、三百名を投じて盛大に踊った。

平成三年の六月、杉並区の友好都市である北海道風連町の白樺まつりに五十名が参加した。風連町は農業主体で山林が多く、風光明媚なところである。メンバーが到着してみると、まず役場の前で歓迎式典、公民館でさらに歓迎会と、町を挙げての歓待ぶりだった。一行は町の老人ホームを訪問し、その庭で阿波踊りを披露して喜ばれている。

八月には同じく友好都市である群馬県吾妻町の岩櫃まつりに八十名が参加。街路灯も少なく、都会と比べるとさみしい町だが、やはり心のこもった歓待をしてくれた。以降、風連町、吾妻町の祭りへの参加は毎年続いている。

この年の大会には徳島より阿呆連、みやび連が友情出演した。また、フジテレビ「夏の終わりの高円寺――夏祭りにかける男」が放映されたが、森田昇栄氏が主人公として登場している。

カール・ルイスも踊る

平成三年四月、アメリカはサンフランシスコのチェリーブロッサム・フェスティバルに六十八名が参加。日系商工会議所が主催した祭りで、現地に日系の人が多いので日本の郷土芸能である阿波踊りをぜひやってほしい、という要請に応じたものである。この直前、湾岸戦争の勃発によって開催中止の可能性もあった。が、主催団体は名称を「平和の祭典」と変更して決行。大企業の中には参加を見合わせたところもあったが、高円寺阿波踊りは現地で大人気を博し、無事民間外交の務めを果たして帰国した。

七月、ＮＨＫくらしのジャーナル「純情商店街に祭りばやしが響く」が放映された。八月の本番には徳島より水玉連が友情出演する。

八月二十三日から九月一日まで、第三回陸上競技選手権大会が東京で開かれた。カール・ルイスが男子一〇〇メートルで世界新記録をマークし、代々木の国立競技場からの実況中継は連日三〇パーセントを越える高視聴率を上げ、日本各地はもとより世界各国に衛星中継されていた。その最終日の閉会式に、高円寺阿波踊り三百名が登場した。

フィナーレは市川猿之助氏の演出により行われたが、出演者の間では「少々舞台的な感じの演出で、広大なフィールドでは映えなかった」という声もある。ともあれ、堅苦しいあいさつで厳粛に始められた閉会式の雰囲気を一転させ、『大会の余韻を最後の最後で引き延ばしたのが阿波踊りだった』（平成四年八月十二日・徳島新聞より）

一度は退場しかけた選手もトラックに舞い戻り、狭い舞台にまで上がりこんで踊り出した。カール・ルイスやレロイ・バレルも踊った。阿波踊りは言葉を越え、国境を越えて心をひとつにする。

中国での思惑違い

平成四年八月、四国放送テレビ「そうなんです、阿波踊りなんです」の番組で高円寺の歴史と阿波踊りが紺屋町演舞場で実況中継された。

九月、中国・北京の日中国交正常化二十周年記念行事に四十五名が参加。

この人数は海外遠征としては少なめである。北京は高層ビルが立ち、道路の整備された近代的な都市であるが、中国に対するやや時代遅れなイメージが、参加者数に多少影響していたようだ。

警察、軍隊あわせて警備員は三千名。八車線もあるような広大な北京の道路で踊る四十五名は、

「ぽつんぽつんとして切なかった」

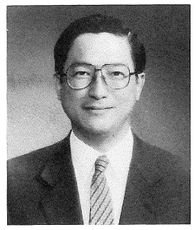
当時のリーダー、杉谷宗彦氏はそう言って苦笑いする。

前方は少年鼓笛隊の列で、演奏しながらどんどん先へ進んでしまう。阿波踊りはゆっくりとしか進めないのに、道路脇の係員たちは早く早くとせかしてくる。後方からは中国の民族芸能のような一連が銅鑼をジャーンとひびかせながらやってくる。おまけに、ふたつあるはずの大太鼓のひとつをホテルに置き忘れてきてしまったため音も迫力が出ない。それでもみな必死になって踊った。

パレードが終わり、道路の警備が解けた時、群衆が一斉に押し寄せてきたので一行は危険を感じ、あわててバスに乗り込んだ。するとバスの窓の外にすずなりになった中国人たちから、口々に握手を求められた。

平成３年、世界陸上の閉会式で。舞台上の左はバレル、右はカール・ルイス

全国の阿波踊りと手を携えて



徳島市長　小池正勝

「高円寺阿波踊り」が、本年、四十周年をむかえるにあたり、記念誌が発刊されますことは、誠に意義深く心からお喜び申し上げます。

「高円寺阿波踊り」は、近年では、全国各地のさまざまな地域で踊られている阿波踊りの草分け的な存在であるとともに、今や東京の夏の風物詩として地元の人はもとより東京都民に広く親しまれ、観客百万人を越える一大イベントに発展しておりますが、このことは、阿波踊りの本場として知られている本市にとりましても喜ばしい限りでございます。

さて、一口に四十年と申しましても、御地で阿波踊りを始めるにあたっては、並々ならぬご苦労があったものと思われます。幾多の困難を乗り越え、今日の隆盛を築き上げられましたのは、東京阿波踊り振興協会の皆様方の御努力はもとより、地域の人々の絶大なる御協力、御支援の賜物であろうと思われます。

本市では、最大の観光資源である阿波踊りをテーマとした観光拠点施設であり、保存・伝承するための施設でもある（仮称）阿波おどり会館を平成十一年秋のオープンを目指して、その建設計画を推進いたしております。

この会館を拠点として、高円寺を始めとする全国各地の阿波踊り関係者とも手を携え、四百年の歴史を持つ阿波踊りが今後ますます隆盛いたしますよう取り組んでまいる所存であります。

最後になりましたが、「高円寺阿波踊り」並びに東京阿波踊り振興協会の皆様方のますますの御発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

「びっくりしたが、歓迎を体で表す国民性に、胸が熱くなりました。あんなに喜んでもらえると本当にうれしい」

「謝謝」「再会」とカタ言の中国語で応じながら握手をかわしたが、最後はみな口もきけぬほど疲れ切ってしまった。その後、天安門の人民大会堂で開かれたレセプションに招待され、弘前の「ねぷた」や千葉の木更津神輿のメンバーと一緒に、市長からお礼の言葉を受けた。中国製陶器の土産ももらった。

こうして、文化交流の一翼を担う役割は果たされたのである。

九月、杉並区役所広報課によって「ビデオすぎなみ三十号――阿波踊りに夢中」が作成された。

昭和62年10月、オランダ・ユトレヒトのジャパン・ウィーク

台風も吹き飛ばせ

平成五年・第三十七回の前日、大型で強い台風十一号が関東に上陸した。阿波踊りの実行委員会は大いに気をもみ、開催決定には三時間もかかった。結局、強風雨を警戒して一日目の二十七日は開始を三十分遅らせて決行、となった。

実際には雨は十五分で止んだため、処置は正解だったといえよう。しかしJRも地下鉄もストップしており、地元以外の連員が高円寺までたどり着くのは大変だったようだ。わずかに動いている電車やバスを乗り継いだり、せっせと徒歩で来たりして集まってきた。

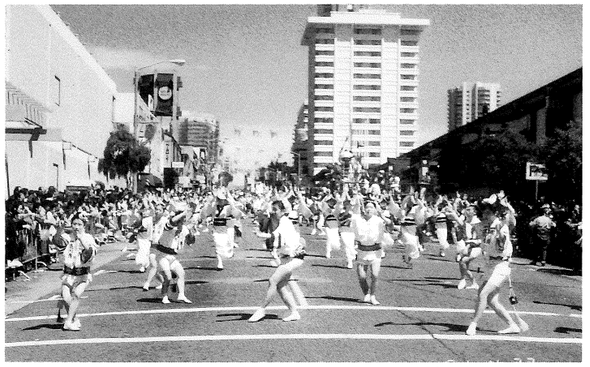
野外のイベントは宿命として天候にほんろうされるが、主催者側の事情は切実だ。来賓を招待しているし、警察の機動隊や消防署、警備のボランティアも準備体制に入っている。中止になれば弁当代などの準備費用があらかた飛んでしまう。遠来の見物客の中には東京の台風を知らぬ者もいて、対応にあたる事務局の電話は朝から鳴りっぱなしだった。

雨天の中止は過去昭和三十八年の大会第二日目の一度だけである。ほかの年は開催前に多少の雨が降っていても、時間通り開催されてきた。それも踊り出すと止んでしまったりと、四十年という長さのわりに天候には恵まれてきたといえる。

また、この年には年末「NHK紅白歌合戦」に五十名が出演した。番組の中ほどの出し物として、沖縄の「ちゃんため」との共演だった。

暮れの忙しい二十九、三十、三十一日と三日間のリハーサルを通した。テレビリハーサルは待ち時間も多い。メンバーは時間のやりくりに苦労したが、国民的に有名な番組への出演ということもあって「面白かった」と語っている。

昭和63年7月、オーストラリア・シドニーの建国200年祭



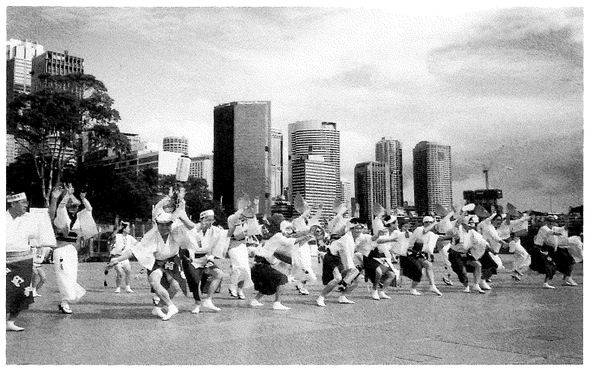
平成3年4月、アメリカ・サンフランシスコの平和の祭典

こんなに賑やかなのは初めて

平成六年五月、東京都とオーストラリアのニューサウスウェールズ州の友好都市提携十周年と、杉並区とウィロビー市との友好都市提携四周年を記念して、東京阿波踊り振興協会八十八名が現地で乱舞を繰り広げた。

シドニーはオペラハウスの前で踊り、ウィロビー市では中心街のショッピング・モールでパレードをした。特に、地方都市で阿波踊りの「処女地」でもあるウィロビー市では市民の関心も高かったようだ。小雨のぱらつく天候にもかかわらず、演舞場となったチャッツウッドの大通りは沿道に市民の人垣ができたという。リズミカルなおはやしにつられて、終盤近くでは大勢の市民がともに手を上げ、足を上げて踊り出した。

ジョン・スクワイヤー市長（当時）は「こんなにぎやかなショーが当地で行われたのは初めてだ」と目を丸くしながら絶賛し、やはり踊りの輪に参加。一行も「こんなに地元と一体になったのは初めて」とその成果に満足そうだった。



平成6年5月、オーストラリア・シドニーにて

上／ウィロビー市で市長も一緒に踊り出す（左から2人目）

右／このニュースは地元新聞のトップ記事として報道された

NORTH SHORE EDITION

Times

YOUR LOCAL CUMBERLAND NEWSPAPER

Vol 40, No 3 Wednesday, May 18, 1994 Circulation 92,848 Phone 414 1400 Classifieds phone 487 1066

Mayor tiptoes through the kimonos

WILLOUGHBY - Mayor John Sanoic, suspended in new mayoral robes, joined in traditional Japanese fish dance in Charnwood last week.

One hilarious moment was when Mr Sanoic, who is 1.95 m tall, found himself towering over a petite young lady.

The chosen model and helper was to do the endorsing. If Mayor of the smiling and dashing were diverted at atmospheric from Marry Cottage and Monte Sant' Angelo.

Japanese dancers, musicians and even a few intrepid Australians tried imitating their hands and making the distinctive down movements with bent knees and tiny steps.

Mr Sanoic, Mr Ray Wood and Charnwood Chief before rushing up to Charnwood hall for an

舞を繰り広げた。

シドニーはオペラハウスの前で踊り、ウィロビー市では中心街のショッピング・モールでパレードをした。特に、地方都市で阿波踊りの「処女地」でもあるウィロビー市では市民の関心も高かったようだ。小雨のぱらつく天候にもかかわらず、演舞場となったチャッツウッドの大通りは沿道に市民の人垣ができたという。リズミカルなおはやしにつられて、終盤近くでは大勢の市民がともに手を上げ、足を上げて踊り出した。

ジョン・スクワイヤー市長（当時）は「こんなにぎやかなショーが当地で行われたのは初めてだ」と目を丸くしながら絶賛し、やはり踊りの輪に参加。一行も「こんなに地元と一体になったのは初めて」とその成果に満足そうだった。

被災者救援のために

そして平成七年の年が明けて間もなく、突如として阪神・淡路大震災のニュースが日本列島を揺るがした。被災者の悲惨な状況が連日マスコミによって報道され、日本各地、あるいは海外からも多くのボランティアが現地へ向かった。

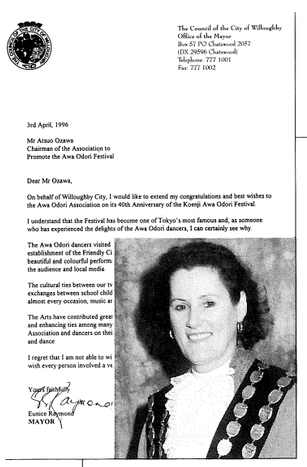
「被災者救援のため高円寺でもできるだけのことをしよう」と、関係者は集まって相談した。

最初は鳴り物の音をテープで流し、駅に義援金箱を設置したらどうかという意見もあった。が、「それなら踊ろうじゃないか。人が出ればお金も集まる」という声が出て、二月の寒空のなか連協会十九連二百人が集まり、高円寺駅前で季節はずれの阿波踊りを披露した。

連員が義援金箱を持って駅周辺の街頭市派遣をはじめ、スポーツを通した交流、議員や職員の相互訪問など、かずかずの交流を重ねることにより、年々強まってきております。そして、こういった交流のほとんど全ての場合、音楽や踊りというものは、式典や集いの中で重要な役割を担っております。

芸術は、さまざまな国々の間に存在する障壁を取り除き、相互理解を深め、きずなを強めることに大いに寄与してまいりました。ですから私は、東京阿波踊り振興協会と踊り手の方々の、音楽と踊りという全世界的な言語を広めることへの努力に対して、賛辞を呈するとともに、感謝の意を表したいと思います。

四十周年記念式典をこの目で見ることができないのは残念ですが、全ての人々が、色とりどりの音楽の祭典の中で幸せに包まれることをお祈り申し上げます。



The Council of the City of Willoughby
Office of the Mayor
Box 57 PO Chatswood 2067
(DX 26598 Chatswood)
Telephone: 777 1001
Fax: 777 1002

3rd April, 1996

Mr Atsuo Ozawa
Chairman of the Association to
Promote the Awa Odori Festival

Dear Mr Ozawa,

On behalf of Willoughby City, I would like to extend my congratulations and best wishes to the Awa Odori Association on its 40th Anniversary of the Koenji Awa Odori Festival.

I understand that the Festival has become one of Tokyo's most famous and, as someone who has experienced the delights of the Awa Odori dancers, I can certainly see why.

The Awa Odori dancers visited
establishment of the Friendly Ci
beautiful and colourful perform
the audience and local media.

The cultural ties between our tw
exchanges between school child
almost every occasion, music a

The Arts have contributed great
and enhancing ties among many
Association and dancers on this
and dance

I regret that I am not able to wi
with every person involved a vi

Yours faithfully
Eunice Raymond
MAYOR

市を代表して お祝い申し上げます

ウィロビー市長（オーストラリア）
ユーニス・レイモンド

私はウィロビー市を代表しまして今回「高円寺阿波踊り」が四十周年を迎えるにあたり、ここにお祝いを申し上げます。

「高円寺阿波踊り」は東京で最も有名なフェスティバルのひとつとなっていると思います。そして、阿波踊りを踊ることの楽しさを一度でも体験したことのある人ならば、その理由がわかることでしょう。もちろん私にも「高円寺阿波踊り」が東京名物となった理由がわかります。

東京阿波踊りのメンバーの方々は一九九四年に杉並区とウィロビー市の友好都市提携四周年を記念して、わがウィロビー市を訪れました。その色とりどりの美しいパフォーマンスは、まさに私たちの記念式典のハイライトであり、観客や地元のマスコミを沸き立たせました。

両都市間の文化を通じた関係は、杉並区中学生のウィロビー

に立った。真冬の野外で、ゆかたやはっぴだけの格好は凍えるように寒い。だが震災で家や家族を失った人はもっと寒いに違いない。連員は声を張り上げ、道ゆく人々に募金を呼びかけた。

そのかいあって、この日寄せられた義援金は一一〇万八、八二三円にのぼり、杉並区役所を通じて兵庫県東京事務所に贈られた。

三月、東京商工会議所百二十周年祭が天皇皇后両陛下ご臨席のもと、東京ドームで開催された。この時、都内で阿波踊りを年中行事としている所（板橋、豊島、杉並、世田谷）に声がかかり、四地区合同で総勢七百五十名が踊った。うち二百五十名が高円寺からの参加である。

この年の本番には徳島から歌舞伎連が友情出演した。

九月にビデオすぎなみ四十二号「阿波踊り伝説」が作られた。高円寺阿波踊りの草創期から今日に至るまでの歴史を、再現を交えながら面白く、わかりやすくまとめたものである。

十月、千葉・幕張メッセで開かれた世界柔道選手権大会では、日本の「ヤワラちゃん」こと田村亮子選手が期待どおり四十八キロ級で優勝。その閉会式に高円寺阿波踊りの八十名が出演し、試合に臨んで自己の力を出し切った各国の選手たちをなごませた。

上／高円寺駅前で義援金の呼びかけ

右／世界柔道選手権の閉会式で。踊りの列に外人選手も加わろうとしている

ただ楽しむだけでなく、もっと社会に貢献していく東京の阿波踊りでありたい

エピローグ

そして迎える平成八年の第四十周年記念大会は、五十年、そして百年へと続く期待をこめて今年も八月二十七、二十八日の二日間にわたって開催される予定である（二十六日に前夜祭）。連協会の十九連、一般連の四十連が参加登録を済ませており、七千人の踊り手と延べ百二十万人の観客動員が見込まれている。

わずか三十八名の踊り手と二千名の観客とでスタートした四十年前とは隔世の感がある。驚異的な発展の理由はいくつも挙げられるだろうが、常に地味な努力を継続してきた大勢の裏方たちにスポットが当たることはまれである。開催の準備にあたる者もさることながら、連の雑用をこなす者や、大会当日踊りも見ずにそれぞれの役目を果たす人間は数多い。それら多くの「縁の下の力持ち」が四十年という長い歴史を支えてきたことを、最後に触れておく。

東京ドームで開かれた東京商工会議所120周年祭。芝のグリーンに色とりどりの衣装が映え、まるで花が咲いたようだった

【女ゆかた】踊りの美しさがさらに……

【男ゆかた】「連」のこだわりがここに

【はっぴ】小人用 その姿だけでも、阿波踊り

【はっぴ】大人用 いなせな男と女が躍動する。

【高張提灯（たかはりちょうちん）】先頭を行く、連の「顔」なり

【鉢巻き】十連十色？のこだわりの一品

これが阿波踊りだ

【笛】すばらしき「よしこの」のメロディー

【手提灯（てちょうちん）、団扇（うちわ）、扇（おうぎ）】縦横無尽に、華麗に、優雅に

【大鼓（おおつづみ）、竹樽（たけたる）】「こくまろ」をかもし出す、その音色

【鉦（かね）】リズムも踊りも「鉦しだい」

【三味線（しゃみせん）】邦楽の深き伝統がここに

【締太鼓（しめだいこ）】身も心も、踊り始めるその音色

【大太鼓（おおだいこ）】静と動のベーシスト

高円寺阿波おどりマップ

ヤットサー

むさしや（阿波踊り用品協会指定店）

あさひBK

庚申通り

むさしん

純情通り

純情演舞場

ヤットサー

東演舞場

高円寺銀座商店会事務所

東京三菱BK

住友BK

WONDER FUL

桟敷

中通り

北口

至阿佐ヶ谷

JR 高円寺駅

至中野

南口

大信BK

駅前噴水舞台

氷川神社

高円寺阿波おどりは、ここの奉納おどりとして始まった。

長仙寺

豊喜屋（阿波踊り用品協会指定店）

高円寺パルアーケード

中央演舞場

パル演舞場

パル商店会事務所

さくらBK

八千代BK

カシャ

写真コンテスト大集合！

中央公園

家光公が鷹狩りの時立寄った。町の名はここに由来する

卍高円寺

ヤットサー

エトアール通り

Pal

桟敷

高南通り

桃園川公園

中央通り

ルック商店会事務所

神田信金

ルック演舞場（第一）

ヤットサー

桃園演舞場

至環状7号線

杉八小

高円寺ルック

扇屋（阿波踊り用品協会指定店）

鎌倉街道

ルック演舞場（第二）

南演舞場

第一勧銀

丸の内線 新高円寺駅

青梅街道

五日市街道